

## 失われた仏教を求めて

入 澤 崇

龍谷大学の入澤です。よろしくお願いいたします。今日は、「失われた仏教を求めて」と題し、パワーポイントを用いて話をさせていただきます。

いまご覧いただいている写真は、大谷探検隊の写真です。大谷探検隊とは、一九〇二年から一九一四年にかけて仏教伝来の跡を探った調査隊で、西本願寺第二二世宗主となる大谷光瑞師を隊長として組織されました。大谷探検隊は、今からちょうど百年前、一九一四年にシルクロードの調査が終結いたしました。この写真は百年前のものです。いよいよ調査の最終局面を迎え、帰路につくべく沙漠を歩むラクダ隊の隊列が写っていますが、写真を撮ったのはシルクロードを調査した最後のメンバー、吉川小一郎という人です。ラクダ約百四十頭、その背に載せられた木箱の中に、シルクロードで収集した文物が入っていたのです。

今日は、話の後半で、大谷探検隊のことを中心に、明治生まれの仏教者である若者たちが如何に壮大なことを構想して、

そして命がけで仏教東漸に関する研究をしていたのか、その一端を紹介させていただければと思っております。

その前に仏教東漸のことを考えてみたいと思います。仏教東漸は、インドで発祥した仏教がどういう経路で中国・朝鮮半島、そして日本にまで伝わったのか、そういった観点で捉えられております。中国への仏教伝播というとき、これまでは現在の新疆ウイグル自治区を通るルートに重点が置かれておりました。いわゆるシルクロードですね。シルクロードが重要なことは言うまでもありませんが、シルクロードばかりに目を向けていると、南の方のことが目に入らなくなります。

私が龍谷大学に奉職させていただいた一九九〇年にシルクロードと中国南方の調査をするという得難い機会に恵まれました。とりわけ、中国南方の調査は仏教東漸に対するこれまでの見方を改めるものとなりました。その調査というのは、中国の長江流域、そして四川省の調査で、後漢から西晋時代のお墓に仏像が見られるのでそれを調べてみないかという話

を中国の方からいただいたのです。これはまさに、仏教の伝播を探るという大谷探検隊が目指したことを継承することになりますので、一九九〇年から一九九三年まで大学の方で予算を組んでいただき、調査に乗り出しました。まずその話から進めていきたいと思えます。

今日、こちらに来るときに新幹線の中でニュースが流れまして、四川省で地震があったそうですが、四川省は有数の地震地帯であります。その四川省のお墓、崖墓と呼ばれていますが、横穴式石室の中から、揺銭樹という副葬品がしばしば出土しています。揺銭樹というのは青銅製の樹木の模型で、木の枝のところに銭が表現されています。いま映っている揺銭樹は幹の部分に仏像が表現されています。これは中国における最初の仏像です。

以前から四川、あるいは長江流域に副葬品に仏像らしきものがあるということは知られてはいましたが、この四川の綿陽という所から出土した揺銭樹を見て、私は大変驚きました。仏像の横に五銖銭というお金を模ったものがついています。これが本当に仏像なのかという人もおられましようが、子細に見ていくとガンダーラの仏像の様式を模したものであることがわかります。スライドの左側が揺銭樹に付いていた仏像です。顔に口髭があり、顔の後ろに頭光が表され、下の方でUの字形に衣が垂れ下がっております。スライドの右側

はアンダン・デリーという所から出土したガンダーラの仏像です。左手で衣の先端を持っており、下で衣がUの字形に垂れ下がっています。口髭、頭光、襟元の表現を見ると揺銭樹に付された仏像がガンダーラの仏像の特徴をよくとらえていることがわかります。驚くべきことに、仏像を付した揺銭樹は二世紀頃のお墓で見つかったのです。

仏像が出現したのは大体一世紀の半ば、ガンダーラと言われております。後漢時代にブツダのイメージは確実に中国に入り込んだのです。四川・綿陽出土の事例のように、仏像の横に銭が付いているということ、これは只事ではないなと思います、四川省を九〇年代初めに調査をしておりました。これは四川省の博物館に所蔵されている典型的な揺銭樹です。葉っぱが銭というわけで、風が吹けば銭が揺れるということで揺銭樹、何ともえげつない名前がついております。これは、死者が死後の世界でお金に困らないようにということで、富を象徴する銭が表現されているのですね。通常はこの揺銭樹に西王母といったような神仙が表現されています。先の例は神仙の位置に仏像が表現されたというわけです。

私たちが四川で調査をしております、これもひょっとして仏像ではないかということで、忠県というところの研究員が博物館で所蔵する揺銭樹を見せに来ました。驚きました。仏像は確認できたのですが、仏像の両側に蟬が表現されてい

るのです。蟬を脇侍にする三尊形式というものは初めて見ました。

仏教が各地域に伝播していくとき、思想としての仏教が入るのではなくて、イメージの方が先に入り込むのです。仏教の「ぶ」の字も知らず、ブツダという存在がどういふものかも知らないけれども、在地の神仙とよく似た性格のもの、つまり外来の神仙として、仏像が中国で迎え入れられたのです。

つまり、先ほどの揺銭樹では、本来は西王母や東王父といわれる中国の在地の神仙を表現するのですが、その代わりにブツダのイメージが表されました。つまり、古代中国において、特に四川地域では、仏像というものをまずは神仙のひとりとして迎えたということになります。これはもちろんスタンダードな仏教ではあり得ません。覚者としてのブツダとしてはなく、神仙として迎え入れられたブツダなのです。

実は、古代日本にも同じような現象が起きています。百済の聖明王がわが国の欽明天皇に仏教を伝えたという仏教公伝はよく知られていますが、それ以前に、仏像は入っていません。奈良の新山古墳から出土した三角縁神獸鏡をご覧ください。縁が三角になっているので三角縁、そして神仙と獸が交互に表現されていることから神獸鏡と呼ばれておりますが、その上部に表現されているのは、先ほど紹介した中国の西王母と東王父、それに仏像です。この鏡は仏像を表現している

から仏獸鏡とも呼ばれています。つまり、古代日本においても、仏教公伝以前に仏像・ブツダのイメージは伝来していたということになります。神仙として迎え入れられていたのです。

さて、先ほどの揺銭樹が出土した場所は四川です。では、四川に仏像の情報ほどのルートで伝わったのかということが問題になります。これまで仏教の中国伝来は、シルクロードを中心にして考えられてきました。北からのルートももちろん想定できます。しかし、インドと中国の最短ルートは、実はインド、ミャンマー、そして雲南のルートなのです。私たちが調査を始めたとき、中国の研究者たちはそのルートを西南シルクロードと呼んでおりました。このルートも可能性のひとつです。さらには、海からというのも想定可能です。海のルートでインドからインドシナ半島、そしてベトナム北部から雲南、四川というルートも考えられます。しかし、後者の二ルートはこれまで検証されないままになっており、未だ詳しいことはわかっておりません。中国への仏教伝来、インドからの仏教東漸は、複数の視点をもつてかからねばなりません。そのような問題提起をなしたのであります。

さて、これまでは仏教東漸に関することでした。ここで西の方に目を転じたいと思います。文化や宗教は東にも伝われば西にも伝播します。仏教西漸というのはこれまでどれほど

問題視されたでしょうか。仏教の伝播について、東への方向は多く語られてきましたが、西へどこまで広まっていたのかについてはあまり問われることはありませんでした。

二〇〇三年に、アフガニスタンで、誰も考えもしなかったところから仏教遺跡が確認されました。これは龍谷大学出身のフリーカメラマンである中淳志さんという方が発見し、毎日新聞で大きく取り上げられました。バーミヤーンから西に百五十キロメートル離れた地点で、仏塔が確認されたのです。これまで全く報告されておりました。

仏教の伝わった西の端は、トルクメニスタンのメルヴ。そこにギャウル・カラという仏教遺跡があり、それが現在、一番西の端だとみなされています。しかし、メルヴにどういいう経路で仏教が伝わったか、詳しいことは解明されておりません。アフガニスタン内では仏教の西限はバーミヤーンとみなされておりました。アフガニスタン中央部でバーミヤーンより西に仏教が伝わっていたことなど、誰も想定していなかったのです。

バーミヤーン以西にどれほど仏教の痕跡があるのかということで、二〇〇四年から毎年、アフガニスタンへ出向いておりました。

先ほどの仏塔があったところはケリガンという村ですが、二〇〇三年にもう一つ大きな出来事がありました。そのケ

リガンに程近いところ、タンギ・サフエーダックという所にも、かつて仏塔が建立されていたことが判明したのです。アフガニスタンの内戦が激化していた一九九〇年代半ばに遺跡から、文字を刻した石板が出土し、全文がバクトリア語で記されていました。それをロンドン大学のシムス・ウィリアムズ教授が解読し、二〇〇三年に内容が公表されたのです。その内容が私たちに大変な衝撃を与えました。

仏塔は、現在は完全に破壊されておりません。碑文の内容は、八世紀前半に地方領主が仏塔を建立したというものでした。先のケリガンの仏塔がいつ頃建てられたか、ひとつの指標を与えてくれます。バーミヤーンの仏教文化は六世紀から八世紀が最盛期で、七世紀に玄奘がバーミヤーンを訪れたこととはご承知のことと思います。バーミヤーンより西で仏教の痕跡が確認され、しかも八世紀という年代が与えられたということは、バーミヤーンの仏教文化を少し拡大して捉える必要が出てきました。

碑文の最後には肉親の繁栄を祈る祈願文が記されておりました。驚くべき内容というのは、前半部分の、仏塔が建立されたときの状況を記した箇所です。テュルクの支配者とアラブの支配者がいる時期に仏塔が建立されたと記してあったのです。アラブの支配者というのは間違いなくイスラームであります。アフガニスタンにイスラーム勢力が入り込んできた

のですが、その時期に仏塔が建立されたというのです。これは大変驚くべき事実です。

インド・中央アジアにおいて、仏教の消滅についてはこれまで、イスラーム勢力がこの地域の仏教を駆逐した、イスラーム勢力の手によって仏教寺院は破壊されたという語り口で説明されてきました。ところが、タンギ・サフエーダック碑文によれば、イスラーム勢力が入ってきてアラブ系の民族が支配をしているときに、地元の地方領主は仏塔を建立したというのです。つまりこれは、仏教とイスラームが共存していたことを物語る歴史資料ということになります。これまでこういう資料はありませんでした。インド、それから今のパキスタン、アフガニスタン、そして中国新疆で、どういう過程で仏教が消滅していったのでしょうか。もちろんイスラーム勢力が仏教寺院を破壊した跡はインドや中国の新疆でも見られます。けれども、それが全てではなかったということですね。仏教とイスラームが共存していたことを示すこの資料は、「仏教とイスラームの邂逅」を再考させる機会を与えてくれたのです。

さらには、玄奘がバミヤーンへ至ったルートを改めて考える機会ともなりました。さきほどのケリガン遺跡はバンデ・アミール川流域にあります。他にもこの川の流域に仏教の痕跡が見つかりました。この川に沿って北上するとバルフ

に到達します。バルフから玄奘はバミヤーンに向かったのです。途中、「掲職国」という国の存在を記していますが、この国がバンデ・アミール川流域にあったことは十分に考えられます。

実は仏教遺跡というのは、「水」がポイントなのです。川の流域、水のあるところに必ず人が住み、そして集落ができ、そこに宗教的なモニュメントが作られます。バンデ・アミール川よりさらに西へ目を転じますと、ムルガープという川があり、アフガニスタンとトルクメニスタンの国境付近にも石窟が存在しています。この川を北上するとメルヴに達します。これまで仏教の伝わった一番西の端と言われている地です。メルヴにはどの経路で仏教が伝わったのでしょうか。アフガニスタン北部やウズベキスタンから仏教が伝来したであろうということは、以前から言われておりました。ただ、ムルガープ川流域も想定しておく必要があります。仏教伝播という観点からムルガープ川に注目するということはこれまで行われていませんでした。詳しい検証がなされねばなりません。

仏教の西への伝播について言えば、実はイランにも仏教の痕跡が残っています。イランの西北部アゼルバイジャン州のマラーゲー近郊、ヴァルジュヴィイという所に、地下に洞穴が掘られていまして、これがミスラ教神殿であるということは以前から指摘されておりました。そのミスラ教の神殿跡に

入ってすぐ、左の部屋に向かうところに仏教の痕跡がありました。複数の龕をもつ八角形の柱です。部屋自体は後代に付加されたものであることは全体の構造を見ると類推できません。部屋の中央部に大きな柱をつくるということは中国新疆の石窟寺院の特色で、中心柱に龕を掘り出し、そこに仏像が安置されました。

部屋の中央に大きな柱を据え、そこに龕を作るということは、他の宗教ではなかなか見出せません。仏像や経典が見つかったわけではありませんが、仏教のものである可能性が極めて高いということで、この地域のことを調べてみました。

イラン西北部にはかつてモンゴル勢力が入ってきています。高校の世界史の教科書にも出てくるイルハン国という大国がここに生まれています。十三世紀半ばのことです。イルハン国は、七代目の王のガザンという人がイスラームに改宗しますが、以前は仏教徒でした。モンゴル勢力がイラン、あるいはトルコに進出するためにイルハン国を建てたのですが、もともとモンゴルの大半は仏教徒であったわけですから、イスラーム改宗以前に、イルハン国の領内に仏教寺院を建立するということは、別段不思議ではないということになります。文献にも史料が残っておりまして、ガザンの宰相ラシード・アッディーンが編纂をした『集史』という書物にイルハン国の歴史が書かれております。注目すべきは、君主のガザ

ンがイスラームに改宗したときに、偶像寺院である仏教寺院、あるいはゾロアスター教の拝火教寺院が破壊されたという記事です。ガザンがイスラームに改宗したとき、仏教寺院が破壊されたということは、イルハン国の領内にそれまで仏教寺院があったということになります。ですから、イラン西北部に仏教寺院の痕跡があったとしても不思議ではありません。ヴァルジュヴィ遺跡にみられる、八角柱を中心柱とする空間は仏教寺院の可能性が極めて高いと言えます。おそらく、ミストラ教の神殿跡の一室を借りて仏教寺院にしたのではないかと考えています。

ここで注意をしなければならぬのは、イスラーム勢力が仏教を駆逐したということがこれまで言われてきましたが、この事例は仏教徒であった君主のガザンがイスラームに改宗するときに、自ら仏教寺院を破壊したという点です。イスラームという外圧で仏教寺院が破壊されたのではなく、仏教徒であった王ガザン自らが仏教寺院を破壊しているのです。これは仏教とイスラームの関係を考える上でも、モンゴル勢力がイスラーム地域に進出してどう変容したのかを考える上でも大きな問題を投げかけるものではないでしょうか。ガザンが仏教憎しで破壊したのかというと、彼は仏教徒であったのですから、そうではなかったはずですが、イスラーム圏に進出して、その地を統治しなければならぬというときに、自

らの宗教を捨てて、その土地のイスラームというものを受け入れたのです。ここにおいても、「仏教とイスラームの邂逅」が問題となります。仏教とイスラームとの出会いを、本気で考えなければならぬと思っているところです。

さて、こうしたアジアにおける仏教の伝播、さらには仏教とイスラームとの出会いということなどを問題意識としてもっていたのが大谷探検隊です。大谷探検隊についてはまだ全容が解明されているわけではありません。いまよりもはるかに情報量の少なかった時代に、果敢にも失われた仏教を求めた若き仏教徒たちのことを、これより紹介させていただきます。

大谷探検隊については、大谷光瑞から話を始めるのが一般的ですが、光瑞のお父さんで明如上人として知られます大谷光尊のことを先ずはおさえておく必要があります。ご承知の通り、わが国では明治に廃仏毀釈という仏教大弾圧がございました。そして当時の仏教界では仏教復興が叫ばれておりました。どうやって仏教を立て直すかが大きな課題とされていたのです。そうしたときに、大谷光尊はいち早く西欧に目を向けたのです。西欧社会で行われているキリスト教に基づく教育制度、その仕組みを日本にもたらし、人材育成することをいち早く心がけたのです。

実は中央アジアへ調査隊を派遣するということは、大谷探

失われた仏教を求めて（入澤）

検隊の調査以前から西本願寺界限でささやかれておりました。かつてシルクロード地帯には仏教寺院が沢山あったが、それらが荒廃に帰しているという情報は、西欧より西本願寺にもたらされていたようです。そこで、大谷光尊は自らが西欧に向いて、その地の宗教事情を探ろうと考えていたようです。ところが父親の広如上人が病弱なこともあり、自分が行けないことになりました。そこで彼は弟子を派遣することにします。その一人が島地黙雷でした。島地黙雷は、周知の通り、後に浄土真宗だけではなく、明治仏教界を代表する重鎮になる方です。

大谷探検隊にはこの島地黙雷の實の息子もメンバーに入っております。そして、日本仏教を学んでおられる方は名前を聞いたことがあるでしょう、島地家に養子に入った島地大等も大谷探検隊に加わっております。そして後で紹介しますが、弟子の藤井宣正も大谷探検隊の主要なメンバーの一人です。

赤松連城という方も西欧に派遣されました。赤松はオックスフォードやケンブリッジなどを視察し、大谷光尊に様々な進言をします。龍谷大学の大宮学舎本館は重要文化財に指定されておりますが、このような建築物がこの時期に造られたわけです。本館の外見は、オックスフォードかケンブリッジの神学校を模したとみなされております。赤松の進言を受け

た光尊のアイディアであったのでしよう。中の札拜堂には、浄土真宗ですからご本尊として阿弥陀如来が安置されております。ですから、この本館は図らずも東洋と西洋が融合した建造物ということになります。

龍谷大学の淵源は一六三九年に始まる学寮にあります。学寮から学林へ、そして明治になって名称を変えて変遷していきます。一般在家の方々を受け入れる普通教校という名称のときに、「反省会」という組織ができています。一説によれば、お坊さんの先生は酒ばかり飲んでいられるということで、学生の中から反省を促す運動が起きたといわれています。「反省」という言葉がまだみずみずしかった頃です。「反省会」から『反省会雑誌』という雑誌が発行されます。いま書店に並ぶ『中央公論』という雑誌は、その前身はこの『反省会雑誌』なのです。

この普通教校の出身者には、高楠順次郎がおります。高楠は普通教校に学び、そして『反省会雑誌』に原稿を数多く寄稿して、オックスフォード大学に留学してサンスクリットを学んで帰って来ます。東京大学で教鞭を執り、さらには仏教精神に基づいた女子教育の必要性を訴えて、武蔵野女子大学の創設に尽力をしました。高楠がオックスフォード大学から京都に戻ってきたときの写真が残っています。

大谷探検隊を知る上では、龍谷大学が「文学寮」という名

称であったときに重要です。なぜなら、第一次大谷探検隊のメンバーは文学寮出身者が多いのです。文学寮時代は仏教の勉強だけではなく、世界を見渡すために語学の教育にも大変力が注がれていました。写真には、外国人お雇い教師ランベルトが写っておりますが、その横に立っているのが大谷探検隊の中で大谷光瑞をサポートする立場でこれから紹介する藤井宣正という方です。これは文学寮のプロフェッサーと学生たちの記念写真ですが、大谷探検隊のメンバーや大谷光瑞をサポートした方々は、実はこの文学寮出身者が非常に多いのです。

そこではいよいよ大谷光瑞の話に入りますが、この方は八歳から特別な教育を受けており、東京大学でインド哲学を講じた原坦山から個人指導を受けております。そして仏教だけではなく、世界各国のことに非常に関心を持ち、一九〇〇年にはロンドンに遊学をいたします。光瑞はヨーロッパでは最初に地理学者として紹介をされております。地理学、地質学、気象学、それから植物学まで手を伸ばしていますので、博學多才な青年であったのです。これは地質学者・地震学者として著名であったジョン・ミルンを訪ねたときの記念写真です。光瑞を中心にして大谷探検隊の若きメンバーが写っています。光瑞の後見役として派遣されたのがもと文学寮教授の藤井宣正でした。これはロンドンでの研究会のときのスナップ写



真です。

光瑞がヨーロッパへ行つた当時、列強諸国が探検隊を組織して、シルクロードの調査をしておりました。当然のことながら、彼らはキリスト教徒であります。そのキリスト教徒である一流の地理学者、考古学者たちが見つけ出すもののほとんどは、仏教遺跡、そして仏教関連の考古遺物だったわけです。光瑞は、それこそは仏教徒であるわれわれがやるべき仕事ではないか、という気持ちを強く持ち、ロンドンにいるときに、インド・中央アジアの遺跡調査をする大谷探検隊の構想を練つたのです。

さきほど申し上げたように、大谷光瑞はまず地理学者としてヨーロッパに紹介されています。お配りしたプリントの方に入つていきたいと思いますが、レジュメをご覧ください。彼が最初に海外旅行をしたのは清朝末期の中国です。その地で仏教寺院が荒れ果てていることをレポートに書き、ロンドンへ送っています。すると、そのレポートの質が大変高いということで、イギリスの王立地理学協会が彼を会員に推挙するということになりました。彼は地理を学び、そして大変な地図の収集家となつて、各時代時代の世界地図の収集をしておりました。仏教者が世界各国のありように関心を持つというのは、当時としてはほとんど考えられません。実は大谷光瑞にとって不幸だったのは、彼のことを理解した人はほんの

一握りだったということです。彼の構想を日本人の多くは、理解することが出来なかつたのです。

ですが、ロンドンにいるときに、彼の構想に大変関心を示した人がいました。小川琢治という、京都大学の地理学教室の初代教授となつた、地理学の専門家です。この方は、大谷光瑞が仏教伝来の跡を探る、そしてインド・中央アジアを限なく調査するという構想に彼自身がときめきました。しかし国費留学生であつたため、自分自身は日本に帰らなくてはなりませんでした。晩年の回想録には、自分も大谷探検隊に参加したかつたと記しております。いま、小川琢治という名前を聞いてもピンとこないかもしれませんが、この方こそわが国で最初のノーベル賞受賞者となつた湯川秀樹博士のお父さんです。

光瑞が収集していた様々な時代の世界地図の一つで、龍谷大学でお宝の一つとなつておりますものに「混一疆理歴代国都之図」がございます。これはモンゴルの世界認識を示す地図で、それ自体は朝鮮半島で制作されていますが、日本とアフリカを書き込んだ世界地図の中では世界最古のもので、これがどういった経路で西本願寺に入ったかはわかつておりませんが、光瑞が非常に大切にしていた地図の一つであります。小川琢治は、のちにこの「混一疆理歴代国都之図」を模写させてくれとお願いをして、その模写は現在、京都大学の

お宝のひとつになっております。

地図の収集、そして世界のありようをつぶさに見つめようとする光瑞を、ほとんどの日本人は理解できていませんでした。その証拠に、一九〇八年の新聞記事には、「西本願寺の大谷光瑞伯は地理狂と呼ばれるほど熱心な研究者であるが、これは別に何らの目的があつてするのではなく、一種の道楽であるそうな」と言われています。このように、彼が地理学的な関心から世界というものにアプローチをしようとしたことは、当時はほとんど理解されていなかったのです。

話を一九〇二年に戻しますが、光瑞そして西本願寺から派遣された若き僧侶がヨーロッパに留学をしておりました。そこで大谷探検隊が組織されます。第一次大谷探検隊は一九〇二年八月十六日にロンドンを出発しております。従来、第一次大谷探検隊という五人名が紹介されておりました。けれども、実際は中国・新疆に二人、インドへは十一人が、ビルマと中国南部の調査には五人が行っております。

第一次大谷探検隊には、大谷光瑞の後見役でもあった藤井宣正がおります。おそらく名前を耳にするのは初めての方がほとんどでしょう。文学寮のプロフェッサーではありませんが、いま、わが龍谷大学の教員でも、藤井宣正という名前を知っている人はほとんどおりません。藤井はこの時代の仏教学者、仏教史の学者であり、仏教美術の専門家でもありまし

た。パリで万博があつたとき、奈良の法隆寺や興福寺の仏像が写真展示されましたが、藤井宣正がその解説を書いていました。また近代日本でインドから日本に至るまでの仏教の歴史を書かれ、わが国で最初に仏教学の辞典を作られた方でもあります。その仏教辞典は亡くなった後に出版されました。

この藤井宣正は、ロンドンにいたときに、ロンドンの英国国教会など調査すると同時に、インド、あるいは中央アジアの仏教遺跡についての研究をしておりました。彼は西本願寺が東京帝国大学に内地留学生を送り込んだ第一号で、東京大学予備門では夏目漱石と同級生でした。ロンドンにいた時は漱石を呼び出して、マックス・ミュラーの墓参りに行くこうと計画を立てていたようでありますが、周知の通り、漱石はロンドンでノイローゼ寸前となっていて、アパートから出られなかつたようです。もう一人、東京大学予備門で一緒だった藺田宗恵という人の日記を読むと、「本日、（夏目）金之助来たらず」と記されております。

藤井宣正は、日本人で初めて仏教遺跡の本格的な調査を行いました。よく知られておりますアジャンターやエローラといった西インドの石窟寺院を本格的に調査をした最初の日本人は藤井宣正です。実は私も恥ずかしながら大学院のある時期まで、藤井宣正という名前を知りませんでした。大変な調査をしているということは、藤井の日記を読んで初めて知

りました。

この藤井宣正の調査を補佐したアシスタント役が島地大等です。文学寮では姫宮大等とっておりましたが、先ほど紹介した島地黙雷の養子になっています。日本仏教学研究の礎を作ったといってもいいほどの方で、『日本仏教教学史』という著書は、いまなお読み継がれております。このような日本仏教学の専門家が、若い頃は、大谷探検隊のメンバーとしてインドの仏教遺跡の調査をしていたことは、日本仏教学を専門とする方々には意外と知られておりません。

私は大学院のときに、藤井宣正の書いた『印度靈穴探見日記』を読みまして、大谷探検隊に対する考えがガラリと変わりました。それまでは、一般に言われているように、西本願寺の若き門主が興味本位で仏教遺跡に行ったのだろうという程度にしか思っていなかったのですが、藤井宣正の日記によって、それがいかに当時の最先端の研究を踏まえた学術調査であるということがよく分かったのです。皆様にお配りしたレジュメの最後に挙げた「第一次大谷探検隊のインド調査」に、誰がどこを調査したのかをざっと書き出しておきました。

これまで、大谷探検隊のインド調査についてはほとんど触れられることがありませんでした。藤井宣正の日記を読んでも、色々と役割分担を決めて、インドの各地方に出かけて調

査をしていることが分かりました。この『印度靈穴探見日記』には、当時まだ日本に石窟という単語が定着していなかったのも、不思議な洞穴という意味で「靈穴」という表現をしております。藤井宣正は、アジャンターをはじめとした仏教石窟を、当時のインド考古局の調査報告書や研究書を携え、実際に一つ一つ調査しております。藤井宣正は、残念ながらインドの調査の後、フランスのマルセイユで亡くなりました。そのため、仏教の研究史の中でも見落とされたのですが、この日記を探り当てたのは、島崎藤村の研究者たちでした。彼らの努力によって、この『印度靈穴探見日記』が発見されました。

藤井宣正はインドにいるとき、奥さまに絵はがきを出しております。その絵はがきは、奥さまの郷里である長野の真宗寺というお寺にいまも保存されています。真宗寺には、若き日の島崎藤村が住んでいたことがありまして、住職から、「うちの娘婿はインドへ調査に行ったが、フランスのマルセイユで亡くなった」と聞かされます。住職から絵はがきを見せられたとき、島崎藤村にインスピレーションがひらめき、この絵はがきを参考に書簡体の小説を書きます。「椰子の葉陰」という小説です。こうして島崎藤村は文壇にうって出たのです。のちに『破戒』や『夜明け前』などの大作を書いています。その若き日の島崎藤村が大谷探検隊のメンバーを

モデルにして小説を書いたということで、島崎藤村の研究者たちが奥さまの郷、真宗寺に行けば何か資料があるのではないかと調べたところ、先ほどあげた『印度靈穴探見日記』が見つかったという次第です。いま、私が館長を務めております龍谷ミュージアムでは『二楽荘と大谷探検隊』という特別展を開催しておりますが、藤井の日記や絵葉書を初め、大谷探検隊のメンバーの遺品を展示してそれぞれのひととなりを紹介しております。

藤井宣正を高く評価していた人物がいます。わが国の宗教学の祖とも言われる姉崎正治です。東京大学で宗教学を講じることになる姉崎は、若かりし頃、藤井宣正の書いた『佛教小史』という著書の書評を書いておりました。姉崎はドイツから留学を終えて日本に帰るときに、インドに立ち寄ります。そして姉崎は敬愛してやまない藤井宣正に同行して、東インド・南インドの調査に参加しました。一昔前に「末は博士か大臣か」という言葉がありました、その「博士」とは姉崎正治がイメージの源泉であるとも言われております。その姉崎は、藤井宣正が亡くなった際に弔辞を書いています。レジュメの中に、姉崎の書いた追悼文を載せておきました。藤井宣正は、インドに入る前から腸が悪くて、日記を読むと「今日も下血」という言葉が頻繁に出てきます。彼の調査はまさに命を懸けたものでした。調査の後半に姉崎正治がカル

カッタの博物館、あるいは東インド・南インドでの藤井の調査を目の当たりにして、彼がいかに勤勉に研究をしていたかを記しております。あとでご覧いただければと思います。

ついでに申し上げますと、島地黙雷の息子もこの大谷探検隊のメンバーに入っており、調査直後にインドで亡くなっていきます。島地黙雷は山口の清水家の出ですが、清水家に実の息子を養子にやっています。息子の名は清水黙爾。彼は文学寮始まって以来の秀才と言われ、サンスクリットが非常に良くできたのです。南條文雄は、清水黙爾がインドへ留学する前に、彼の下宿に向いて腹薬を与え、「体には気をつける」と伝えたそうです。南條文雄が非常に将来を嘱望した人物であったわけですね。その辺りのことは『南條文雄著作選集』第十巻の月報に書かせていただきました。そして清水がインドに留学しているときに、ロンドンにいる大谷光瑞から声が掛かって、インドの調査に合流したというわけです。ところが彼も調査が終わった後、ボンベイ、いまのムンバイで亡くなります。ですから、明治仏教界の重鎮である島地黙雷は自分の息子を失い、弟子で将来を嘱望していた藤井宣正も失い、大変な悲しみを味わったというわけでありました。

文学寮の元教授の中では、藤井宣正とともに大谷探検隊に蘭田宗恵も参画をしておりました。この方はドイツに留学を

しておりまして、その前は文学寮の教授からアメリカへ浄土真宗を伝えるということで、北米開教師として派遣されました。彼は、大谷光瑞とともにガンダーラの地域の仏教遺跡調査をし、多くの仏像あるいは仏伝図の類いをもたらししました。ガンダーラの寺院が遺跡となりまだ保存が行き届いていなかった頃です。大谷探検隊がガンダーラで収集した仏像の類いは現在、中国の旅順博物館に所蔵されております。

大谷探検隊はインドで仏教の伝播の跡を探ったわけですが、大きな目的は二つありました。一つは石窟寺院の調査、そしてもう一つはアショーカ王の事蹟を探る研究です。この時期、アショーカ王の事蹟が明らかとなりつつありました。釈尊が誕生した、いまのネパールのルンビニーにアショーカ王が柱を建て、碑文を残しております。そこには、この地で釈尊が誕生したということが記されていきました。このルンビニーの石柱は、一八九六年、フューラーが発見し、その六年後に日本人で初めてルンビニーに入って調査をしたのが大谷探検隊でした。先ほどの清水黙爾がここで記念写真を撮っています。この頃、日本人のほとんどはアショーカ王という存在を知らなかったのですが、大谷探検隊はアショーカ碑文に多大なる関心を寄せました。ヨーロッパではこのアショーカ碑文が次々と解説されていたのです。ヴィンセント・スミスという研究者が一九〇一年にそれまでの研究を踏まえた『アショー

カ王』を出版しております。その翌年に大谷探検隊はインドへ向向き、アショーカ碑文の拓本をとってまいりました。現在、この拓本は龍谷大学の図書館に所蔵してあります。日本人がアショーカ王の碑文について詳しく知るようになるのは、東京大学の宇井伯壽氏による『阿育王刻文』が出版されて以後のことです。それは一九二七年のことです。その二十五年も前に、アショーカ王の碑文に関心を寄せ、調査を行なったのが大谷探検隊であったわけです。

この碑文からは、アショーカがどういう政治を行なったかが分かるのですが、ご承知のように「武力による統治」から「法による統治」に大きくコンバートをした、その「法による統治」に多大なる影響を与えたのが仏教でした。アショーカ碑文の文章には、経典が出ております。実際に仏跡の巡礼を行なって多くの仏塔を建立し、貧しい家の人々のために施しの家を設置し、あるいは動物のための病院まで建立していたということがこの碑文から分かります。それから、国境地帯は辺境の異民族と一触即発の状況になるものですが、異民族も保護するということを碑文で述べております。仏教に心を寄せながらも、異なる宗教を保護するということを碑文から読み取ることが出来ます。

この時期に大谷探検隊の他に、もう一人アショーカ王に多大なる関心を寄せた日本人がおりました。それが文豪の森鷗

外です。わが国で最初にアショーカ王のことを出版したのは、この森鷗外なのです。大村西崖という密教学者と共著という形で、『阿育王事蹟』という書物を出版しております。小説家、それから軍医、医者であったところまではよく知られておりますが、森鷗外は仏教に多大なる関心を寄せ、アショーカ王にも興味を示していたのです。実は、この『阿育王事蹟』に出ているルンビニーの石柱の写真は、先ほどの大谷探検隊の清水黙爾が写っていた写真が使われています。森鷗外が大谷光瑞に連絡を取り、写真を是非使わせてほしいと伝えたそうです。そして、石柱の後ろに写っていた清水黙爾たちをうまく消して、アショーカ石柱を紹介したのです。明治の文豪である島崎藤村や森鷗外が、このように大谷探検隊に結びついているのです。

さて、先ほど大谷光瑞の理解者は少なかつたと申しました。その数少ない理解者の一人に、明治の代表的な建築家であり、建築学の大家である伊東忠太がおります。彼は若き日に京都の平安神宮を設計し、後に東京の築地本願寺の設計をしております。築地本願寺は一風変わった、これが仏教の寺かと思われるような非常に特異な仏教寺院です。この伊東忠太が若き日に、第一次大谷探検隊の中国隊と偶然に中国で出会っております。その記念写真がこれです。これは実は本邦初公開で、現在龍谷ミュージアムの方で展示しております。これが

伊東忠太で、両側にいるのが中国に入った大谷探検隊のメンバーであります。伊東忠太は法隆寺の柱がギリシャのエンタシスに由来するのではないかという仮説を立て、大陸に渡って雲崗石窟を発見した後、陸路でトルコ・ギリシア方向を指していました。その途中の貴州・雲南の省境でばったり、大谷探検隊の中国隊と出くわします。その日の日記には、「自分はなんと姑息な人間か」と記し、法隆寺の柱云々ということしか見えていなかった、ところがアジア全域に目配りをして仏教伝来の跡を探ろうとしている人がいると、大谷光瑞のプランに打ちのめされております。こうして彼は帰国後に大谷光瑞と接触をし、築地本願寺の設計に繋がっていくというわけです。

大谷探検隊といえはシルクロードのイメージがあまりにも強いのですが、このようにインドの調査を綿密にしており、そして南方の調査、中国の南部にまで目配りをしていたのです。アジアに仏教伝来の跡を探る、シルクロード調査もその一コマとしてあったわけです。中国新疆のタクラマカン沙漠、その周辺のオアシス都市がいくつもあり、そのオアシス都市に乗り込んだのが列強諸国の探検隊、スヴェン・ヘディン、あるいはオーレル・スタインという探検家で、続々と仏教遺跡を探り当てていました。

第一次大谷探検隊のうちシルクロードに出向いた渡辺哲信

と堀賢雄、彼らはふたりとも文学寮の出身で藤井宣正に教えを受けておりました。ふたりは中国新疆へ入り、多くの文物を収集しております。江上波夫さん、あるいは上野アキさんという著名な研究者が大谷探検隊の若き隊員は非常に見る目があったと述べております。遺跡で発見したもののの中には結局現地に置いてきたものもあるのですが、これは重要だというものを日本にもたらしているというのです。

いまお目にかけているのは中央アジアでは非常に珍しい青銅製の仏像で、コータン出土のものであります。いまは東京国立博物館にございます。ガンダーラの北にスワートというところがあります、そこから出土した仏像と非常によく似ているのです。スワートとコータンは地域間交流があったのではなにかということはこの仏像から類推できます。

彼ら二人はクチャにも行っています。クチャは鳩摩羅什の生まれたところです。当時日本に考古学という学問ジャンルはまだ生まれておらず、考古学という名前すらありませんでした。ふたりのうち、堀賢雄はオックスフォードで地理学を学び、測量技術、そして発掘の手ほどきを受けております。堀はスバシで現地人を使って発掘調査をしております。これはわが国で最初の発掘調査です。それはいまの水準から言うとは非常に稚拙なものです、考古調査をわが国で最初に行なったのは大谷探検隊ということになります。

失われた仏教を求めて（入澤）

大谷探検隊がもたらしたもののから、どういう研究が可能かという点にふれておきます。東京国立博物館に所蔵されている大型の舍利容器があります。クチャからもたらされたものです。蓋の部分にはキューピッドが表現されています。この胴体部に非常に面白い絵が描かれておりまして、二十一人の楽人・ダンサーが表現されております。その中には、動物の面をつけて踊っている者がいます。そして、横笛や太鼓のような楽器もみることが出来ます。クチャというところは、今でも観光に行くと演奏のモチベーションを受けるほど、古い時代から音楽が盛んであったところですが、このように楽の音に合わせて踊る人物を描き、獣の面をつけて踊るといっはいったい何でしょうか。ご覧いただいておりますの通り、何とも奇妙なダンサーたちです。

亀茲国（いまのクチャ）で行われた音楽は亀茲楽として有名でした。実は『一切経音義』という唐代の仏教書に、この図を彷彿とさせる面白い記述があります。亀茲楽にふれるところ「蘇莫遮」という演目の紹介をしている箇所があります。特徴のひとつに「獣面」というのがでてきます。「蘇莫遮」という演目は獣の面をつけるのが特徴だとされているのです。大型舍利容器に描かれているのは亀茲楽で、「蘇莫遮」という演目であると特定できます。この地域では仏塔の前で、そのような演目が実際に演じられていたのでは

ないでしようか。

さらに興味深いのは、その蘇莫遮は「遮」の字が異なりますが、大阪の四天王寺で、舞楽の一つ「蘇莫者」として今も演じられているのです。ここでも猿が登場し、やはり獣が出てくるということで、クチャの「蘇莫遮」と類似しています。ですから、はるか遠く離れたシルクロードから、こういう舞楽の一つが日本に伝来をしたということを、大谷コレクシヨンが語っていると考えられるわけです。

一九〇八年から一九〇九年にかけては、第二次大谷探検隊として、橋瑞超と野村栄三郎が派遣をされますが、橋瑞超は楼蘭で大変なものを発見します。「李柏文書」と言われる、紙が中国で普及し始めた頃の資料を楼蘭で見つけるのです。これは、年代が分かる紙の資料としては最古級のものだということですが、いま、龍谷大学のお宝のひとつになっておられます、重要文化財にも指定されております。正式には『李柏尺牘稿』と申しまして、内容は手紙の下書きです。紙の資料は中国内地では戦乱に次ぐ戦乱で古いものはほとんど残っていないのですが、新疆地域は乾燥している気候が幸いして、古いものが残っていたのです。

楼蘭は多くの仏塔があったのですが、この楼蘭遺跡を見いだしたのはスウェーデン人のスヴェン・ヘーデンです。ところが、ヘーデンは仏教のことは全く知らず、仏塔を見いだし

ていても、それらが仏塔であることすら気がつかなかったのです。その楼蘭は、いまでこそ場所が分かっていますが、当時はJTBや近畿日本ツーリストがあつたわけでもなく、ガイドブックというものもありません。そんな中、大谷探検隊がどうやって遺跡に辿り着くことが出来たのか、私は常々疑問に思っておりまして。実は、大谷光瑞が国際的なネットワークを張り巡らせていて、直接、遺跡を見つけ出した本人から場所を聞き出していたのです。この写真は一九〇八年に、ヘーデンを大谷光瑞が西本願寺に招いた時の記念写真です。和服を着ている外国人がヘーデンで、こちらが大谷光瑞、大谷光瑞の奥さま、そして大谷光瑞の妹である九条武子さんも写っています。このとき、ヘーデンから直接楼蘭の場所を聞き出し、当時トルファンにいた橋瑞超に電報で緯度・経度を知らせました。こうして橋は楼蘭に辿り着き、先ほどの「李柏文書」を発見するに至ったわけです。

もう一人の野村栄三郎は、トルファンでベゼクリクという石窟に入り、調査をしております。その当時、壁画が現地の人によって破壊されておりました。壁画の顔料が農作業の肥料になるといふ全くのデマを、現地の人には信じてせつせと剥がしていたのです。また、人物像が見つかったと、夜な夜な村を襲いに来るといふデマを信じて、目を潰していたりしていたのです。それを目の当たりにした世界各国の探検隊は、現



地に置いておけば必ずや破壊されると感じ、ベゼクリクの華麗な仏教壁画は人類の文化遺産にすべきだということで、各国の探検隊が部分部分を持ち帰ったわけであります。

野村も「誓願図」と呼ばれる壁画の一部を日本にもたらしました。以前、私たち龍谷大学チームはベゼクリク石窟の「誓願図」の復元を行いまして、二〇〇五年二月にNHKで放映された「新シルクロード」という番組で公開いたしました。それぞれの探検隊が持ち帰って各国に分散している壁画を何とか集めてデジタル復元できないかという話を受けてのこととして、大変な作業であったのですが、理工学部の方たちの手を借りてなんとかそれを行いました。

「誓願図」の一部を紹介しましょう。右上の部分はいまもベゼクリクの石窟の壁画の一部として現地に残っているものです。右下の部分は大谷探検隊がもたらしたもので、現在、韓国の中央国立博物館に所蔵されています。左側と下の部分はオーレル・スタインが持ち帰りました。いまはニューヨークの国立博物館が所蔵しております。そして、真ん中の過去私の肝心な部分がないのですが、ドイツ隊の報告書を読むと、この剥がされている部分の特徴が記されておりまして、報告書などを参考にして、復元をいたしました。すると、古代仏教を研究するものにとってはよく知られております、中央アジアに行き渡っていた「燃灯仏授記」の物語がま

ざまざと甦ってまいりました。

「燃灯仏授記」の作例は、アフガニスタン東部とパキスタン北部のいわゆるガンダーラ文化圏に非常に多く見られるものであります。ところがインドに入ると作例は非常に少ない。この物語は中国新疆にも伝わりました。ガンダーラ文化圏の仏教が中央アジアに強い影響を与えていることは壁画の内容からうかがえます。ベゼクリク石窟の「誓願図」はかつて回廊に十五面並んでいたのです。龍谷ミュージアムが二〇一一年にオープンするに際し、「燃灯仏授記」を含む「誓願図」が並んでいた回廊を原寸大で復元できないかという話が持ち上がりまして、龍谷大学デジタルアーカイブ研究センターが、高さ三・五m、幅一・二mの回廊を復元いたしました。華麗な仏教壁画が並んでいた空間を常設しております。京都にお越しの際は、ぜひ龍谷ミュージアムにおいでください。かつてのシルクロードの仏教寺院の中がどのようなものであったか、その一端を体感していただければと思います。

大谷探検隊の第三次調査隊は一九一〇年から一九一四年にかけて行われました。橋瑞超が引き続き三次の調査も行い、吉川小一郎があとで派遣されます。ここでも多くのものを発見するのですが、橋はそれまで誰もやらなかったことを試みます。一度入ったら生きては帰れないといわれるタクラマカン沙漠を、彼は南から北へ縦断をしております。この橋の

辿ったルートはいまなお、ロンドンの王立地理学協会ではタチバナルートと呼んでおりまして、橘がそのときに使った地図が大事に保存されております。橘は綿密に計画を立て、冷静に事を運びました。この乾燥地帯でも仏教が伝わり、オアシスという空間には仏教に対する信仰、そして人々の営みがあったわけです。そうした乾燥地帯とはどういうものなのか、沙漠空間を彼は身をもって検証しようとしたわけでありました。

一方の吉川小一郎も、前人未到のこゝを行いました。ヨーロッパの探検家たちがそれまで行わなかったお墓の調査です。吉川はトルファンのアスターナ古墳に入り、「伏羲女媧図」を発見しております。ところが、オーレル・スタインが後に入りまして、大量の「伏羲女媧図」を見つけ、アスターナの遺跡を徹底的に調査したものですから、吉川の存在はスタインの調査の陰にかくれてしまいました。アスターナ古墳群の調査の先鞭をつけたのは第三次の大谷探検隊であったわけです。また吉川は敦煌莫高窟の調査もしております。

大谷探検隊は仏教伝来のルートを探ったのでありますが、調査の内容は多岐にわたっております。大谷光瑞は植物の標本も採って来させています。気象の調査も行わせています。大谷光瑞は生態学的観点から調査を行わせようとしていました。人間の生きる環境、仏教が行き渡っていた環境に関心があったのです。一九一四年、バダインジャラン沙漠を行く吉

川小一郎の写真、冒頭お見せした写真がそうです。大谷探検隊シルクロードの調査終結の写真です。

さきほど申し上げましたように、いま、龍谷ミュージアムでは特別展「二葉荘と大谷探検隊」を開催しております。大谷探検隊は、調査に実際出向いた人と日本にいてサポートした人、そしてさらに大谷光瑞が何度もインドに出向いており、それに随行した人、そういう人たちを含めると、なんと四十二名を数えます。この度はこの四十二名の各人にスポットを当て、彼らの遺品を中心に展示をしております。これまでに、大谷探検隊の中でほとんど取り上げられることのなかった人、例えば、足利瑞義や柱本瑞俊という方も紹介しています。

大谷探検隊がもたらした資料は、神戸の六甲、岡本の地に建てられた大谷光瑞の別邸に集められました。これが「二葉荘」です。独特な外観をもつことで知られた二葉荘ですが、ここで研究が行われました。中はインド室、イギリス室、中国室、あるいはアラビア室など、光瑞は若い人に世界はどうなっているのかを見せようと、世界各国の部屋が作られました。実はこれは十日前の出来事なのですが、インド室に掛けられていた絵が、竹内栖鳳の描いた絵であると判明し、京都新聞の一面に取り上げられました。

大谷探検隊に集ったメンバーたちはインドそして中央アジ

アに向きましたが、それらの地ではもう仏教が失われておりました。彼らにとつては決して他人事ではありませんでした。危機意識は相当なものでした。明治初期に廃仏毀釈があり、どんどん軍部が力をつけていくという状況で、仏教精神に基づき若き人材を育成せねばという目的で、光瑞は武庫中学という学校を二楽荘に設けます。仏教学研究に関係する人では、花山信勝氏がこの武庫中学の出身者であります。東京大学の教授になられた方です。この二楽荘では、探検隊による収集品の展示も行なわれました。二楽荘は博物館の機能も持っていたのです。新聞にも二楽荘を公開するという記事が出ております。公開された日には、六甲の中腹にたくさんの人が集まりました。わが国で最初のシルクロードブームということになるかと思えます。また橋瑞超は、自ら見いだした中央アジアの経典を研究しておりました。二楽荘から学術雑誌『二楽叢書』を発売しました。ウイグル語の『法華経』、『観無量寿経』を『二楽叢書』で紹介しております。また、橋はモンゴル語の研究も行なっております。少年少女に向けて、少年雑誌で沙漠の体験を語っております。

大谷光瑞は、本願寺の錦華殿というところと、この二楽荘を往復しておりました。錦華殿は現在、京都女子大学に移築されております。京都女子大学、当時の文中女学校という学校は、先ほど紹介した足利瑞義の姉である甲斐和里子さんが

創設しています。武庫中学の初代校長は足利瑞義が務めました。すなわち、二楽荘と京都女子大学は兄弟関係であったわけです。足利瑞義のお姉さんがいまの京都女子大学を創立し、そしてそのバックアップをしたのは大谷光瑞の奥さまと妹君の九条武子さんでありました。

西本願寺で財政問題が浮上しまして、大谷光瑞が宗主を辞任するということになります。大谷探検隊も終結を余儀なくされ、壮麗な二楽荘も人手に渡ります。二楽荘を取得したのは大実業家の久原房之助。そのことも新聞に大きく出ました。そして、シルクロードの仏教壁画・仏像の類いは、久原房之助と同じ山口県出身で同郷のよしみということで久原から寺内正毅にプレゼントされます。寺内正毅はのちに総理大臣になりますが、その当時は朝鮮総督府の初代総督をしておりました。このようなことから、キジル石窟の壁画などの大谷コレクションが海を渡り韓国に行くわけです。その後、二楽荘はどうなったかと申しますと、火事で失われてしまいます。おそらく放火ではないかと言われております。

大谷光瑞が最後まで手放さなかったもの、それは仏典の類いでした。旅順にも別邸があり、そこで橋瑞超が調査・研究を続けておりました。五十二冊のスクラップブックに大谷探検隊が中央アジアで見つけた仏典写本の断片を貼り付けて、橋が一点ずつ、写本断片が何がどの経典であるかということ

を調べていたのです。いまのようにインターネットに用語を放り込めば検索できるという時代ではありません。実に地道な作業を行っていたのです。仏典写本は非常に価値が高いということ、旅順博物館が大切に保存をしてくださっています。仏典写本とそれにインド・ガンダーラで収集した仏像なども旅順にございます。

二楽荘において光瑞は、僧侶たちに仏教を教えるということと、地方に帰って地域の人たちをとかく食べさせるための農業指導に力を入れました。宗主辞任の後にも、インドネシアあるいは中国で農業育成ということを行なっておりました。トルコにも行き、ブルサのギョクチェン家と一緒に絹織物産業の合併会社を作ったりもしております。日本だけでなくアジアの復興を意図していました。さらに大谷光瑞は東洋と西洋を鉄道で結びつけるという構想を本気で考えておりました。かつては仏教が行き渡り繁栄していたアジアをもう一度再興して、西欧近代文明と結合させようと考えていたようです。

さて、大谷探検隊はアフガニスタンには入らなかつたのですが、関心は持っております。いまご覧にいられている穏やかな仏像が、血で血を洗うようなところから見つかっていませんが、実は紀元前からこの辺りは紛争に次ぐ紛争で紛争地帯でありました。そういうところで仏教が必要とされ、こうい

う穏やかな顔の仏像が沢山作られていたわけなのです。近年アフガニスタン東部で新たに仏教遺跡が発見されました。私とともにアフガニスタンの調査をしていたアフガニスタン考古局の知人がいま調査しています。メス・アイナクという遺跡でそこから仏像・壁画が発見されたのです。これは最近、中国がアフガニスタンにどんどん進出しています。銅山開発を進めている過程で、見つかったものです。アフガニスタンでこれまで見つかった仏教遺跡の中では一番大きい遺跡かもしれません。ところがこれはいま、風前の灯火でありまして、壊される寸前であります。遺跡保存よりも銅山開発を進めていくという判断が優先されているのです。遺跡からほぼ完全な形で見つかったものの中に、先ほども紹介した「燃燈仏授記」の物語が表現された彫刻がありました。師仏の燃燈仏の足が泥で汚れると思ひ、とつさに長髪の鬘を解いて髪で泥を覆った前世の釈迦。この地とは、こうした泥にまみれることを厭わない人格というものが本気で求められていたのだと、私は思っております。

シルクロードの仏教文物を見ますと、異文化交流のあつた跡が非常に多く目につきます。イラン系の民族が仏教を受容すれば文物にイラン的要素がみられ、ギリシア系民族が仏教を受容すればギリシア的要素が見られる。イラン系民族やギリシア系民族が仏教徒になり得た状況があつたことを、排他

意識が強まっているいま、もう一度見つめ直す必要があるように感じています。異文化交流が盛んに行われていたり、大きな仏教寺院が造られたり、そのようなことは社会に「和」が実現していなければ、そのようなことはあり得ません。今日の世界情勢を見るにつけ、失われた仏教の跡というものから、私たち現代社会に何が欠けているかを考えてみたいと思っているところでございます。

最後は駆け足になりましたが、私の話は以上とさせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。

#### 【講演者の関係論著】

- 入澤崇「仏教初伝南方ルートの研究」『龍谷大学仏教文化研究』所報 十六号、一九九二年
- 同「揺錢樹仏像考」『密教図像』第十二号、一九九三年
- 同「仏と霊―江南仏飾魂瓶考―」『龍谷大学論集』第四四号、一九九四年
- 同「海の道」『新アジア仏教史六 仏教の東伝と受容』佼成出版社、二〇一〇年
- 同「パーミヤーン以西で新たに見つかった仏教遺跡」『印度学仏教学研究』第五六巻第一号、二〇〇七年
- 同「ムルガープ川流域への仏教伝播」『印度学仏教学研究』第五七巻第一号、二〇〇八年

失われた仏教を求めて（入澤）

- 同「イランの仏教遺跡」『印度学仏教学研究』第五八巻第一号、二〇〇九年
- 同「イラン西北部仏教遺跡に見られる中国文化」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第十二号、二〇一〇年
- 同「アフガニスタン仏教遺跡学術調査研究シンポジウム 人類の至宝アフガニスタン 仏教西漸」龍谷大学、二〇一〇年
- 同「日本によるアフガニスタン仏教遺跡の調査」龍谷大学アジア仏教文化研究センター、二〇一二年
- 同「シルクロード探検の旅へ―大谷探検隊の軌跡―」『特別展 仏教の来た道―シルクロード探検の旅』龍谷ミュージアム、二〇一二年
- 同「スリランカの大谷探検隊」『パーリ学仏教文化学』第十七号、二〇〇三年
- 同「南條文雄と西本願寺」『南條文雄著作集十 月報』うしお書店、二〇〇三年
- 同「大谷探検隊とガンダーラ」『ガンダーラ美術とパーミヤーン遺跡展』静岡県立美術館、二〇〇七年
- 同「未完の大谷探検隊」『聚美』第十三巻、二〇一四年
- 同「大谷探検隊の軌跡と意義」『龍谷大学と大谷探検隊』『特別展 二楽荘と大谷探検隊―シルクロード研究の原点と隊員たちの思い―』龍谷ミュージアム、二〇一四年